

自伝とメディアが創り上げた“全聾の天才作曲家” 問題発覚までの経緯と審理の対象となった番組

審理の対象としたすべての番組が虚偽の事実を伝え、視聴者に誤解を与えた疑いがあるなかで、委員会は、個々の番組ごとに経緯の検証をするだけでなく、全体状況を俯瞰的に把握することで、メディアによる虚偽の「物語」の補強や増幅といった効果が見えてくるのではないかと考えた。

そこで、放送以外の他のメディアの動きも視野に入れながら、問題発覚までの経緯を時系列で整理する。そして、その流れのなかで、審理の対象となった番組を位置づけて紹介する。

1 佐村河内氏の自伝

番組で伝えられた佐村河内氏の人物像は、のちに述べる審理対象番組の概要を見れば分かる通り、自伝の記述に基づいているところが多いので、時系列の整理をする前に、まず、自伝でその半生がどのように描かれているのかを紹介しておこう。

ピアノの英才教育

1963年、被爆2世として広島市に生まれた。

4歳の誕生日に、自宅でピアノ教室を開いていた母親からピアノの入門書「赤バイエル」をプレゼントされ、ピアノのレッスンが始まった。母親は、佐村河内氏に英才教育を施し、ミスタッチをすると手をたたくななどの厳しい指導を行った。赤バイエルと黄バイエルを4か月で終え、小学校に入学するまでに、ハノン、チェルニー、ブルグミュラーといった教則本も終了した。併行して、読譜（楽譜を読むこと）を中心とした訓練であるソルフェージュのレッスンを受けた。母親が弾くピアノの音を五線紙に書き取っていく聴音が得意で、長いメロディをすべて聴き終ってから記憶を頼りに五線紙に書き取るテストも大好きだった。

小学校に入学後は、ソナチネを1年、バッハのインベンションを1年で終えた後、ソナタ、コンチェルトへと進み、ショパンの「幻想即興曲」やベートーベンの「月光」、「熱情」等を習得した。ソナタ、コンチェルトを終えるまでに1年半を要し、10歳になった。

ソナタをすべて制覇した日の夜、母親から教えることはなくなったと告げられた。母親は、これから先どうするかは「あなたが決めなさい」と言った。

交響曲の作曲家への夢

その夜、自分は何が好きなのかを突きつめて考え、交響曲の作曲家になろうと決意を固めた。

5年生のとき音楽教師に勧められてブラスバンド部に入部した。同級生の部長の前

で、シューマンの難曲「クライスレリアーナ」を弾いたところ、彼女はとても驚いた。家の外では音楽とのつながりを隠していたが、彼女は唯一音楽のことを何でも語り合える秘密の友だちになった。

この時期から、市内の図書館で、楽式論、和声法、対位法、楽器法、管弦楽法などの文献を制覇し、書店でフーガの研究書などの専門書籍を購入するなどして、高度な音楽理論を独学で学んだ。

中学校、高校でも、独学で音楽求道に邁進した。

高校3年生のとき、音楽大学には進学しないと決めた。いまの音大の作曲科で学ばされるのは現代音楽だけで、師事した教師の現代音楽の作風からはずれた音楽を書くことは許されず、クラシック音楽の作曲家として身を立てることなど認められない時代だと悟ったからだ。母親が猛反対をする中、弟が応援してくれた。

上京後の音楽活動

高校卒業後、18歳で作曲家を目指して上京し、独学で音楽の勉強を続けた。クラシック音楽で生計を立てるために、まずは映画やドラマの音楽を作る作曲家になり、そこから道を開いていこうと考えた。オーケストラの楽譜を手に、知人に紹介された映画音楽のプロデューサーに会ったが、「音大も出ていないモグリの作曲家に大金を払ってオーケストラで録音しようというプロデューサーはいない」と一蹴された。シンセサイザーなどを使って作ったデモテープを持って売り込んだが、相手にされなかった。

ロックバンドのボーカルデビューの話があったが、唯一の理解者だった弟が交通事故で死亡し、断念した。耳鳴りが悪化し、聴力が低下するなか、後世に残せる交響曲を作りたいという気持ちになり、音楽の勉強を続けた。

転機 映画・ゲーム音楽へ

音楽の勉強に集中する中、ようやく転機が訪れた。NHKの『山河憧憬』の音楽を担当し、33歳のとき、映画「秋桜」の音楽を担当した。「秋桜」が評価され、ゲームソフト「バイオハザード」の音楽担当に抜擢された。さらに、戦国時代を舞台にしたゲームソフト「鬼武者」の音楽を担当することになった。大編成のオーケストラで演奏することになり、子どものころからの夢、交響曲の作曲という目標に近づいた。

聴力の低下

17歳の夏、突然の発作が襲った。路面電車で帰宅中、太陽がまぶしく感じ、左目の奥に焼けるような激痛が走ってホームに倒れ込んだ。大学病院で診察を受けたが、原因不明の強度の偏頭痛と診断された。

上京後は、生活費を稼ぐために、居酒屋や工事現場などで働いていたが、偏頭痛の発作を重ねるたび、仕事をやめなければならなかった。家賃が払えなくなり、半年間路上生活を送ったこともあった。

1988年、24歳のとき左耳に閉鎖感を覚えて聴力が低下し始め、耳鳴りも始まった。翌年から右耳の聴力も落ちていった。26歳のころ、耳鼻科で、両耳とも突発性難聴だった可能性があると診断され、放置していたため根治率は0パーセントであると告げられた。

やがて光が目に入るだけでも偏頭痛が誘発されるようになった。補聴器を着けていたが、1993年に左耳は完全に聴力を失った。右耳も、1995年から聴力が次第に衰えていった。

音を喪くした日

「鬼武者」の制作発表会の前の1999年2月、目を覚ますと、いつもと何かが違うと感じた。すべての音が消え、両耳が全く聞こえなくなっていた。シンセサイザーの鍵盤を激しくたたき、聴力を確かめようとした。補聴器の電池を替えたが音は全く聞こえなかった。35歳で全聾となった。

完全に聞こえなくなった耳でいかに作曲をするか。自分にひとつのテストを課した。幼少時によく演奏していたベートーベンの「月光」のメロディを頭の中で流し、その旋律を五線紙に記譜するのだ。記譜を実際の楽譜と照合したところ、一音のミスもなく完全に一致した。管弦楽30曲でテストを重ねた結果、絶対音感が全く衰えていないことを確認できた。作曲を続けていく自信が持てるようになった。

1999年4月、絶対音感だけで作曲した「交響組曲ライジング・サン」は、邦楽演奏者を含む200人余りの巨大オーケストラで演奏され、絶賛された。この制作発表会で、耳の障害を公にした。

「自分が作った音楽を自分で聴くことすらできない」という虚しさにさいなまれた。

「交響曲第1番」の作曲へ

制作発表会の日を境に、音楽界から姿を消した。

2001年、「鬼武者」の音楽に着目した世界の有力誌である米「TIME」誌から取材を受けた。ピアノを演奏すると、記者と英語通訳者は涙を浮かべて喜んでくれた。

TIME誌のインタビュー以来、ピアノで人を喜ばせることができると分かり、障害を持つ子どもたちの施設を訪問し、ボランティアをした。帰り際、ひとりの女の子が「次はいつ来てくれるの？」と声をかけてくれた。自分を求めてくれる子どもとの出会いをきっかけに、生きていることの実感を思い出すことができた。長く中断していた「交響曲第1番」の作曲を再び始めた。

日に日に耳鳴りはひどくなり、頭鳴症（頭全体に鳴り響く重度の耳鳴り）が慢性化した。ボイラー室に閉じ込められたように、一瞬たりとも轟音が鳴りやまなくなった。のたうちまわるような苦闘を経て、2003年秋、「交響曲第1番」を完成させた。

*

*

*

この自伝は、講談社から2007年10月に出版された。音楽を担当したNHK衛

星ハイビジョンの番組『21世紀・仏教への旅』に出演していた著名な作家の紹介によるものだった。自伝の帯には、その作家が「もし、現代に天才と呼べる芸術家がいるとすれば、その一人は、まちがいなく佐村河内守さんだろう」と推薦文を寄せた。

自伝の出版を契機に、さまざまなメディアで取り上げられる機会が増えていった。

自伝の出版以前の出来事も含めて、佐村河内氏はメディアでどう取り上げられたのか、おもなものを、放送は、放送以外のメディアはとして、時系列で以下に記述する。

1996年

8月、佐村河内氏と新垣氏が出会う。

1997年

1月3日、NHK総合で『山河憧憬 武蔵野』が15分放送。「音楽 佐村河内守」とのテロップ表示あり。

5月、全国紙が「秋桜」上映の話題を報道。佐村河内氏に関する紹介はなし。

1998年

6月、経済紙が、ゲームソフト「バイオハザード」大ヒットと報道。作曲者として佐村河内氏の名前も。

1999年

8月、雑誌「放送技術」がゲームソフト「鬼武者」の楽曲に関連した詳細な記事を掲載。佐村河内氏のインタビューも紹介。

2001年

9月、米「TIME」誌が、佐村河内氏は聴覚障害を抱えながら「鬼武者」を作曲と紹介。

12月、広告雑誌が、「鬼武者」のヒットについて、ゲーム会社のプロデューサーのインタビュー記事を掲載。音楽担当者として佐村河内氏の名前も。

2007年

1月7日～11日、NHK衛星ハイビジョンで『21世紀・仏教への旅』が放送(全5回、各回110分、第2回のみ107分)。「音楽 佐村河内守」とのテロップ表示あり。

10月、講談社から自伝が出版される。

2008年

2月、全国紙が、聴力を失ってから15の作品を生み出した作曲家と報道。

○4月、女性誌が、日本のベートーベンではないかと佐村河内氏の半生などを紹介。

6月、地方紙が、G8下院議長会議の記念コンサートで、広島交響楽団による「交響曲第1番」が初演されると報道。

○7月、全国紙が、佐村河内氏と障害者との音楽的な交流を紹介。

8月、地方紙が、佐村河内氏の8月6日の平和記念式典参列を報道。

9月、地方紙が、広島で開かれたG8下院議長会議の記念コンサートで、佐村河内氏作曲の「交響曲第1番」が演奏されたと報道。

2 TBSテレビ『NEWS 23』「音をなくした作曲家 その闇と旋律」 (2008年9月15日放送 22分)

佐村河内氏を最初に大きく取り上げたテレビ番組は、TBSテレビ『NEWS 23』だった。担当のAディレクターは、講談社の広報担当者から、番組で取り上げてもらえないかと自伝を渡され、こんな数奇な運命に翻弄されるような人生があるのか、と強烈なインパクトを受けた。挫折しながらも頑張っている佐村河内氏の人生は、多くの人の共感を呼ぶのではないかと企画提案をし、記念コンサートに向けて取材を進めた。この特集は、番組後半の“若手制作者の競作企画”コーナーで紹介された。

『NEWS 23』「音をなくした作曲家 その闇と旋律」

広島で開かれたG8下院議長サミット記念コンサートの映像で、特集は始まる。広島市長(当時)の紹介で舞台上がる佐村河内氏。彼に両耳の聴覚がないこと、原爆の地獄を描いた彼の交響曲がこの日初めて演奏されたことなどが紹介される。

佐村河内氏作曲のピアノ曲が静かに流れるなか、スタジオのキャスターは、今夜は10年前に両耳の聴覚を失った佐村河内氏の抱える闇と、その音楽をお伝えすると述べる。

横浜市の自宅の暗い居間や楽器のない「音楽室」に座り込んでいる佐村河内氏が映し出される。聴覚を失った後も、耳鳴りや頭の中で轟音が鳴り響く「頭鳴症」に苦しめられ、明るい光を見ると発作が起きるので室内でもサングラスが外せないとなレーションが入る。机に向かい、後頭部を拳でたたく映像にあわせて、楽器に触れることなく頭の中だけで音符を組み上げていくと作曲方法が紹介される。

古い写真やイメージ映像によって、佐村河内氏の半生が再現される。被爆2世として広島で生まれ、4歳になると母親からピアノの英才教育を受けたこと。小学4年生でもう教えることはないと言われ、交響曲の作曲家になる決意を固めたこと。17歳の夏、左目の奥に激痛を感じる初めての発作に襲われたこと。35歳で両耳の聴覚を失ったこと。

ゲームソフト「鬼武者」の楽曲作りを依頼され、両耳が聞こえなくても楽曲を正確に楽譜に記録できる絶対音感を確認して、200人を超えるオーケストラで演奏する「ライジング・サン」を作曲する。「アメリカの有力誌『TIME』で佐村河内の特集が組まれた」と、記事の映像とともに紹介される。

そして39歳のとき「いつしか頭の中で流れる“轟音”と広島の被爆者たちが聞いた“絶望の音”が共鳴する」70分を超す「交響曲第1番」を完成させたことが伝えられる。

聴覚を失った後、障害を持つ子どもたちと交流を重ねていることが紹介される。京都の施設でピアノに触りながら子どもの演奏を聴く映像に、「佐村河内は、指先から伝わる振動と心の耳で彼

女の演奏を聴いていた」とナレーションが入る。そして、何色にも音符を塗り重ねた「創作ノート」を披露して、「私の命ですよ」と語りかける様子が紹介される。

核軍縮をテーマに広島で開かれる、G8議長サミットの記念コンサートで、「交響曲第1番」が初演されると記者会見で発表される。楽団の指揮者と、佐村河内氏を応援し続けてきた作家の、初演に期待するコメントが紹介される。コンサート前夜、出身小学校を訪れた佐村河内氏が、当時のままのピアノを見て、懐かしがりながら演奏する場面も映し出される。

コンサート当日、交響曲の演奏が流れる中、8月6日の平和記念式典や灯籠流しに参加した佐村河内氏の姿が紹介される。演奏の終了後、障害を持つ少女に手を引かれてステージに上がった佐村河内氏は手話で挨拶し、さらに楽屋でインタビューに答えて「お客さんに感動した」などと語る。「そして彼は再び、闇に包まれた音楽室で作曲を続けている」というナレーションが、表情と手の映像に重なり、特集は終わる。

自伝の表紙のアップでスタジオに戻り、佐村河内氏が「交響曲第2番」を書き終えて第3番を作曲中ということなどが伝えられる。

○11月、総合雑誌が、佐村河内氏の半生や音楽についてインタビューを掲載。

12月、全国紙（地方版）が、佐村河内氏の「広島市民賞」受賞を報道。

2009年

5月、全国紙（地方版）が、佐村河内氏が原爆犠牲者の鎮魂と核廃絶を願って作曲した「レクイエム・ヒロシマ」を子どもたちが合唱と報道。

3 テレビ新広島『いま、ヒロシマが聴こえる・・・～全聾作曲家・佐村河内守が紡ぐ闇からの音～』（2009年8月6日放送 55分）

通信社の配信記事で佐村河内氏の存在を知ったテレビ新広島のBディレクターが、8月6日の原爆の日特別番組として企画し、子どもたちの「レクイエム ヒロシマ」の合唱をハイライトに、佐村河内氏の半生も紹介した。広島県内だけではなく、フジテレビ系列の多くの局で、日時を変更して放送された。

番組はのちに、2009年度の放送批評懇談会ギャラクシー賞テレビ部門奨励賞を受賞し、2010年の日本民間放送連盟日本放送文化大賞テレビ部門のグランプリ候補となった。

『いま、ヒロシマが聴こえる・・・～全聾作曲家・佐村河内守が紡ぐ闇からの音～』

広島出身の被爆2世で全聾の作曲家・佐村河内守。すべての被爆者を鎮魂する「レクイエム ヒロシマ」を被爆3世の子どもたちと合唱したいと活動し始めたことが、前年のG8議長サミット記念コンサートでの「交響曲第1番」の初演や、自宅のカーテンを閉めた薄暗い部屋で壁に頭を打ち付ける映像などとともに、プロローグ的に紹介される。

古い写真やイメージ映像によって、佐村河内氏の半生が再現される。被爆2世として広島で生まれ、4歳になると母親からピアノの指導を受けたこと。交響曲の作曲家になりたいと思っ

たこと。17歳の夏、原因不明の強度の偏頭痛の発作に襲われたこと。高校卒業後上京し33歳で映画音楽を作曲したこと。日常生活では明るい光を避け、現在も毎月2回病院に通っていると伝える。

障害を持つ子どもたちとの交流ぶりが紹介される。京都の施設でピアノに触りながら子どもの演奏を聴き、「宝物は光の中にはない。闇の中に巧みに隠されている」と語りかける。

合唱曲の上演に向けて、佐村河内氏の活動が本格化する。小学校時代の恩師に協力を依頼すると賛同が得られ、実行委員会が作られたことが紹介される。実行委員会に参加する高校の音楽系クラブや、少年少女合唱団などの練習風景が映し出される。

15歳で病気のため亡くなった広島市の少年の家を、佐村河内氏が訪問する。骨肉腫で片足を失った少年を、コンサートに招待したり病院に見舞いに行ったりしていた交流の様子が紹介され、少年の母親が感謝の気持ちを語る。

合唱曲の全体練習に、佐村河内氏が顔を見せ、指揮者に注文を出す映像に「顔の表情や伝わってくる空気から、歌声を感じ取る佐村河内さんです」とのナレーションが入る。そして、原爆に反対し平和を思う気持ちを伝えるために闇を背負おうと、子どもたちに呼びかける。母校の小学校を訪れた佐村河内氏は、子どもたちの前で被爆直後の広島の写真を少しずつ広げて見せながら、こんなことが許されると思うか、原爆は絶対悪だと毅然とした口調で語りかける。

合唱演奏会当日、広島市の少年の家で遺影に手を合わせる佐村河内氏が映し出される。「子どもたちと付き合うことで、作曲する力とか勇気を与えてもらっている」と語る。会場の平和記念公園で、佐村河内氏との再会を喜ぶ車いすの子どもの姿なども紹介される。

平和記念公園の親水テラスで、「レクイエム ヒロシマ」が126人によって合唱される。その歌声に「伝えるヒロシマと学ぶヒロシマ いま、ヒロシマが聴こえる」とのナレーションが重なる。最後に佐村河内氏の「怒らんとため。怒らんようになったら終わりじゃ」という声を紹介して、番組は終わる。

2010年

4月、全国紙が、佐村河内氏作曲の「交響曲第1番」が東京芸術劇場で演奏されたことを報道。

日本コロムビアのプロデューサーがこの演奏を聴き、終演後、佐村河内氏にCDにしたいと申し出る。

8月、全国紙が、「交響曲第1番」全楽章が京都で初演されることを報道。

8月、全国紙が、佐村河内氏の寄稿「作曲家魂 聴覚障害に勝つ」を掲載。

4 テレビ朝日『ワイド！スクランブル』「人間一滴 被爆2世の天才作曲家 魂の交響曲」(2010年8月11日放送 17分)

テレビ朝日のCディレクターは、全国紙の記事を読み、聴力がないのに交響曲を作曲する佐村河内氏に関心を抱いて、『ワイド！スクランブル』の「人間一滴」コーナーで取り上げることを提案。8月6日、原爆の日の広島で、映画監督が、音楽に託す思

いなどを佐村河内氏にインタビューした。

『ワイド!スクランブル』「人間一滴 被爆2世の天才作曲家 魂の交響曲」

コーナー担当の映画監督が、スタジオで「8月6日、広島から、ある作曲家の奇跡の一滴をお届けする」と紹介する。

原爆投下から65年を迎えた2010年8月6日、原爆ドーム前で、映画監督と佐村河内氏が出会う。「交響曲第1番HIROSHIMA」を作曲した被爆2世の天才作曲家は、35歳で全く耳が聞こえなくなると、ナレーションで紹介される。原爆ドームの中で、佐村河内氏が、死没者の魂の叫びを感じるなどと語る。

耳鳴りに苦しむ佐村河内氏が自宅で壁に頭をぶつけながら作曲する姿が映し出され、「音のない世界での曲作り、それは壮絶な現場だった」とのナレーションが流れる。佐村河内氏は「上から音が降りてくる感覚がある。真実の音なのではないかと思える」と語り、耳鳴りや頭痛がひどく、強い光を見ると発作が起きるため、カーテンをしめた薄暗い部屋で、サングラスをかけて過ごすで紹介される。

監督のインタビューに答えて、佐村河内氏の半生が写真やイメージ映像とともに紹介される。

4歳から母親の英才教育を受け、10歳のときにはショパンやベートーベンを弾きこなし、交響曲の作曲家になろうと思っていたこと。17歳の夏に原因不明の激痛に襲われたこと。35歳で聴力を失い、現在もその絶望感を乗り越えられていないこと。聴力を失った後、ゲームソフト「鬼武者」のテーマソングを完成させたこと。

そして8月6日、平和記念公園に佐村河内氏を慕って集まってきた子どもたちが映し出される。ピアノに触れている佐村河内氏のそばで、生まれつき右腕に障害を持つ少女が、佐村河内氏からプレゼントされた左手だけで弾けるピアノ曲を演奏する姿などが紹介される。佐村河内氏が「自分の音楽を通して闇を感じ、あとにくる小さな光の尊さを感じてもらおう」と語り、映像は終わる。

最後にスタジオで、佐村河内氏がピアノに触れている映像にあわせて、佐村河内氏は手から伝わるピアノの振動で音楽のごときものがわかると説明される。監督や他の出演者から佐村河内氏への応援メッセージが贈られ、次回コンサートの予告や、佐村河内氏の自伝に寄せた著名な作家の推薦文の紹介で締めくくられる。

11月、複数の全国紙(地方版)が、佐村河内氏作曲の「管弦楽のためのヒロシマ」の広島初演を報道。

2011年

7月、複数の全国紙が、「交響曲第1番」のCD発売を報道。

○8月、音楽雑誌が、「交響曲第1番」の作曲について佐村河内氏のインタビュー記事を掲載。

11月、音楽雑誌が、佐村河内氏の半生についてインタビュー記事を掲載。

2012年

5 NHK総合『情報LIVE ただいま!』「奇跡の作曲家」 (2012年11月9日放送 28分)

NHKが佐村河内氏を取り上げた最初の番組である。『NEWS 23』で佐村河内氏の特集を担当したAディレクターは、NHKの契約ディレクターになっていた。佐村河内氏とは個人的な交流を続けており、音楽活動の広がりやCDの売上げの反響を見ながら、8月ころに特集企画として提案。佐村河内氏が一般にはあまり知られていなかったため、人物紹介に焦点があてられた。

『情報LIVE ただいま!』「奇跡の作曲家」

スタジオの司会者が、きょう紹介するのは日本だけでなく世界から注目されている曲、しかも作曲したのが「奇跡の作曲家」と呼ばれる日本人だと伝える。

「交響曲第1番HIROSHIMA」の演奏にあわせて、作曲したのは14年前に両耳の聴力を失った佐村河内氏だと紹介される。「TIME」誌の記事が映し出され、下線が引かれたBeethovenの文字に「世界でも名高いアメリカのニュース雑誌では、現代のベートーベンと讃えられ、今、最も注目すべき作曲家として紹介されています」とナレーションが流れる。

CDの売上げが、クラシック部門初登場で1位という異例の記録、音楽プロデューサーや著名作曲家の賞賛のコメント、「天才作曲家」「奇跡のシンフォニー」というネット上のリスナーの声などが紹介される。

佐村河内氏の自宅に映像が変わると、カーテンが引かれた薄暗い「音楽室」や、大量の薬や激しい耳鳴りで発作を起こし横たわっている佐村河内氏が映し出される。そして、体調のいい時だけが作曲の時間と紹介される。

続いて、写真やイメージ映像、それに本人へのインタビューも交えて、その半生が紹介される。

被爆2世として生まれ、幼時に母親からピアノやバイオリンの英才教育を受けたこと。小学6年生で40分の楽曲を作曲、交響曲の作曲家になる夢を持っていたこと。高校2年生の時、左目の奥に激痛が走り、原因不明の偏頭痛と診断されたこと。高校卒業後上京して楽曲の売り込みに歩いたが誰からも相手にされず、工事現場などで働きながら作曲を続けたこと。

音符がびっしり何色にも塗り重ねられた「創作ノート」が紹介され、頭に浮かんだメロディを一心不乱に書き記していたとのナレーションが入る。

映画音楽、ゲームソフトの楽曲の依頼などで、音楽活動が広がっていた35歳の時に聴覚を失ったこと。絶対音感を頼りに作曲したゲームソフト「鬼武者」の楽曲で高い評価を得たこと。聴覚を失った悔しさやみじめさから音楽界から姿を消したことなどが紹介される。

失意の時期に始まったのが、障害のある子どもたちとの交流だった。生まれつき右腕に障害を持つ少女が、バイオリニストをめざすのを応援するうちに、逆に「大きな光をもらった」という。こうした交流を通して、聴覚障害を受け入れることができるようになり、2003年、ついに「交響曲第1番HIROSHIMA」を完成させたことが紹介される。

その演奏が流れる中、福島原発事故の避難者など、交響曲に感動したという人たちの反応が、ネット上で広がっている映像が重なり、VTRは終わる。

スタジオでは、「交響曲第1番」で使用されている22の楽器の一覧表が示され、音楽雑誌によ

るクラシックのベストディスク30の15位にランクされたことが説明される。さらに佐村河内氏の半生や音楽に対する司会者やゲストの感動のコメント、視聴者から届いた感想、音楽家の賛美のコメントなどが続き、あわせて約7分間紹介された。

11月23日、テレビ朝日『モーニングバード!』『週刊人物大辞典』のコーナーで、CDの品切れが相次いでいる「交響曲第1番」を紹介しながら、佐村河内氏にインタビュー。その生い立ちや作曲風景を約10分放送。

12月12日、NHK総合『あさイチ』で、『情報LIVE ただいま!』の放送後の視聴者の反響や、スタジオのゲストの反応を約25分放送。

2013年

○1月、全国紙が、作曲家による「交響曲第1番」の批評記事を掲載。

2月、全国紙が、「交響曲第1番」の出荷数が8万5000枚を超えたと報道。

2月、全国紙が、「交響曲第1番」のCDが東日本大震災の被災地で売り上げを伸ばしていること、被災地のための鎮魂歌を作るため、佐村河内氏が宮城県女川町の海辺で野営したことを報道。

6 NHK総合『NHKスペシャル 魂の旋律 音を失った作曲家』 (2013年3月31日放送 49分)

Aディレクターは、佐村河内氏の取材の総仕上げの思いもあって、『NHKスペシャル』に企画を提案した。佐村河内氏の音楽活動の広がり、東日本大震災の被災地で「交響曲第1番」が共感を呼んでいること、佐村河内氏が被災者のために贈る「レクイエム」の作曲過程と被災地での演奏会を描くことがねらいだった。母親を津波で亡くした少女と佐村河内氏との交流などを被災地でロケしたほか、佐村河内氏が自宅で作曲する様子を密着取材しようと試みた。

『NHKスペシャル 魂の旋律 音を失った作曲家』

拍手に沸くコンサート会場の舞台へ向かう佐村河内氏。途中から拍手の音が消え、その称賛の声は彼には届かないとナレーションが始まる。「TIME」誌の映像を背景に「佐村河内の音楽は世界の有力誌でも高く評価され、現代のベートーベンと讃えられている」などと佐村河内氏を紹介する。「しかし、音のない世界での作曲は壮絶を極める」と説明し、絶え間ない耳鳴りに苦悶する様子や、テレビのスピーカーに触ってわずかな振動から音を感じ取る様子なども紹介したあと、番組のタイトルが映し出される。

佐村河内氏作曲の「交響曲第1番HIROSHIMA」について、7万枚を超えるCDの売上げを記録したこと、著名な作曲家と音楽評論家の2人が絶賛するコメント、東日本大震災の被災

地で「希望のシンフォニー」と呼ばれていることなどが紹介される。「音を失った作曲家は、どのようにしてこの大作を生み出したのか」というナレーションのあと、映像は佐村河内氏の自宅に切り替わる。

日常生活の様子が詳しく紹介される。カーテンを閉め切った暗い部屋、手話通訳による会話、机があるだけの仕事部屋、瞑想しているように見える作曲活動などの映像とともに、35歳で聴力を完全に失ったこと、絶え間なく続く耳鳴りに苦しんでいること、大量の薬を服用していることなどが伝えられる。そして、聴覚を失ったのに作曲できるのは絶対音感があるからだと説明し、「耳鳴りのノイズの隙間から降りてくる音を五線紙の上につかみ取る」という作曲のイメージがCGの画像で紹介される。

続いて、佐村河内氏の半生が描かれる。幼い頃から作曲家を夢見てきたが、17歳の夏、目の奥に激痛が走って意識を失い、聴力の低下と耳鳴りが始まったこと。高校卒業後上京し、「創作ノート」にメロディを書き続けたこと。35歳の時、ゲームソフト「鬼武者」の制作でオーケストラの作曲の仕事をつかんだが、制作発表会の時には聴力が全く失われ、絶望の底に沈んだこと。その後、障害や病気のある子どもたちとの交流によって転機が到来したこと。

生まれつき右腕に障害を持ち、義手でバイオリンを演奏する少女と交流する様子が紹介される。演奏中のバイオリンに佐村河内氏が触っている映像に、「指でバイオリンに触れ 音色を知る」とテロップが入る。佐村河内氏は、少女に自作の曲「ヴァイオリンのためのソナチネ 嬰八短調」をプレゼントし、少女は、4年もかけて片手で折り続けた千羽鶴を贈る。「困難という闇の中に身を置きながら、希望を求め続ける人のために曲を作ることに、作曲家として生きる意味を見いだした」とのナレーションが入る。

広島の被爆2世として、「交響曲第1番HIROSHIMA」に取り組んだ佐村河内氏は、全響にもかわらず、なぜ交響曲の作曲ができたのか。そのイメージを再びCG画像で詳しく紹介し、交響曲の演奏にあわせて、メロディや構成のすばらしさが音楽評論家による楽曲分析を交えて説明される。

番組の後半は、佐村河内氏が、東日本大震災の被災地のためにレクイエム（鎮魂曲）を作曲する姿をつぶさに追う。母親を津波で亡くした宮城県石巻市の少女と出会った佐村河内氏は、少女の自宅を訪問した後、通っていた小学校で、少女に被災体験や母親への思いを尋ねる。

しかし、曲作りは難航する。追い込まれて自宅の床を這いずりまわる姿、深夜の公園で苦悩する姿、少女の母親が亡くなった宮城県女川町の氷点下の海辺で野営をする姿など、「創作の苦しみ」が映し出される。

曲作りを始めて2か月、寝ずに2日間を過ごした佐村河内氏は、自宅の「音楽室」を出ると「完成しました」と告げる。そして、楽譜を書くために再び「音楽室」に入る。カメラは後を追うが、「佐村河内氏はこの作業を出産にたとえ、とても神聖なものと考えている」とナレーションが入り、撮影を拒否されたことが伝えられる。翌朝、入室を許されると、机の上には14分のピアノ曲の楽譜が置かれていた。

数日後、佐村河内氏は少女と「ピアノのためのレクイエム イ短調」の演奏会場となった小学校の体育館へ向かう。多くの聴衆を前に、国際的に活躍するピアニストの演奏が始まる。演奏に合わせて、「魂を鎮める“祈り”」「ぶつけようのない“怒り”」「引き裂かれた人々をつなぐ“愛”」

など、曲を説明するテロップが入る。佐村河内氏が被災地を歩く姿や海辺で野営する姿が再び映し出され、「闇の中でつかんだ“光の旋律”」というテロップをはさんで、少女の母親の写真へとつながっていく。

演奏を聴き終えた佐村河内氏と少女は、校庭の慰霊碑で手を合わせて祈りをささげる。「迫力があっていい曲だと思った。ママとの思い出を思い出したりした」と少女は語る。手をつないで歩く2人の後ろ姿に「自らの命を削ってつかみ取った旋律が、またひとつ生まれた」というナレーションが重なり、番組は終了する。

4月11日、フジテレビ『めざましテレビ』が、オリコンチャートで「交響曲第1番」が前週の175位から2位に急上昇などと約4分放送。

4月、全国紙も同様の報道。

4月18日、フジテレビ『スーパーニュース』が、「交響曲第1番」が異例のヒットをしていると約5分放送。レコード店の様子、オーケストラ映像、佐村河内氏へのインタビューなどで紹介。

○4月、女性誌が、被災地のために佐村河内氏が「ピアノのためのレクイエム・イ短調」を作曲した経緯を報道。

7 TBSテレビ『金曜日のスマたちへ』「音を失った作曲家 佐村河内守の音楽人生とは」(2013年4月26日放送 54分)

クラシックで異例のヒットを飛ばしている「旬の人」として、佐村河内氏を取り上げる企画が持ち上がり、Dディレクターらが佐村河内氏に出演交渉。スタジオの明るい照明は、身体への負担が大きいため、インタビュアーが自宅を訪問するのであれば、という条件で実現した。佐村河内氏の半生を再現ドラマで詳しく紹介したほか、スタジオでは東京交響楽団が「交響曲第1番」を生演奏した。

『金曜日のスマたちへ』「音を失った作曲家 佐村河内守の音楽人生とは」

「交響曲第1番HIROSHIMA」の生演奏がスタジオに流れる中、「今、16万枚という異例の売上を記録しているクラシックのCDがある」とのナレーションが入る。作曲者の佐村河内氏を、「全聾の聴覚障がい者」「絶対音感を頼りに作曲を続けている」「『TIME』誌でも取り上げられ、現代のベートーベンと呼ばれ、孤高の作曲家として今話題の人物」などと紹介する。

番組タイトルの表示後、メイン司会者が、スタジオの光が苦痛で佐村河内氏は来られないので、インタビュアーとしてタレントが佐村河内氏の自宅に取材に出かけたことを伝える。このタレントの主演映画の音楽を担当したのが、佐村河内氏だったという。

VTRが始まり、身体障害者手帳、自宅の暗い居間、楽器のない「作曲部屋」などが映し出される。続いて、写真や本人へのインタビューも交えて作られた再現ドラマによって、佐村河内氏の「壮絶な音楽人生」が紹介される。ピアノの先生だった母から英才教育を受け、絶対音感を身に付け、交響曲を書くという人生の目標に向かって音楽理論を独学したこと。17歳の夏に

原因不明の発作に襲われたこと。高校卒業後は音楽大学に進学せず、上京して楽曲の売り込みに歩いたが誰からも相手にされず、アルバイトで糊口をしのぎながら作曲を続けたこと。

音符がびっしりと書き込まれた「創作ノート」を見て、タレントが驚きの声を上げる映像が挿入され、再現ドラマは続く。結婚した直後に唯一の理解者だった弟を突然亡くしたこと。聴力が悪化する中で映画音楽の制作依頼を受けたこと。それを機にゲーム音楽に活路を拓いた喜びも束の間、35歳でついに全聾となったこと。絶望しながらも絶対音感を頼りに完成させた壮大な「鬼武者」の楽曲が絶賛されたこと。

自分で作った曲が聴けなくて虚しかったと、当時を語る佐村河内氏のインタビューをはさみ、再現ドラマはさらに進行する。絶望のうちに音楽業界から姿を消したが、自分を求めてくれる障がい者施設の子もたちに希望の光を見いだしたこと。生まれつき右腕に障がいを持ち、義手でバイオリンを弾く少女から千羽鶴を贈られ、現在も交流が続いていること。

立ち直った佐村河内氏が、原因不明の頭痛や発作に苦しみながら「交響曲第1番HIROSHIMA」を完成させた様子が映像で再現され、絶賛する音楽評論家のコメントが紹介される。そして「これからも真実の音を紡ぎ出してゆくことだろう」とのナレーションが入り、再現ドラマを中心にした約33分余のVTRは終了する。

最後に、スタジオで再び「交響曲第1番HIROSHIMA」の一部が約7分間生演奏され、聴き終えたレギュラー出演者が感想を述べて、番組は終了する。

4月27日、NHK Eテレが、日本フィルハーモニー交響楽団による「交響曲第1番」のコンサートを約80分放送。番組内で佐村河内氏をVTRで紹介。

5月1日、NHK総合『あさイチ』が、NHKスペシャルで紹介した「ピアノのためのレクイエム・イ短調」の創作過程を中心に約21分放送。

6月、自伝が幻冬舎から文庫化。

8 日本テレビ『news every.』「被災地への鎮魂歌 作曲家・佐村河内守」(2013年6月13日放送 12分)

日本テレビのE記者は、NHK『情報LIVE ただいま!』を見て佐村河内氏を知り、戦争をテーマにした企画の取材交渉をしたが、佐村河内氏からいったんは断られる。その後、佐村河内氏側から、6月13日に発表する新曲「ピアノ・ソナタ第2番」に合わせた企画はどうかと打診される。自宅、被災地のロケを経て、来日したピアニストによる新曲発表会を撮影し、当日の特集として放送した。

『news every.』「被災地への鎮魂歌 作曲家・佐村河内守」

佐村河内氏の新曲「ピアノ・ソナタ第2番」のピアノ演奏の映像を流しながら、スタジオのキャスターが、きょう都内で新曲発表会が行われ、東日本大震災の被災者への鎮魂の思いが込められていたと伝える。

VTRが始まり、200人の観客を集めたクラシックでは異例ともいえる新曲発表会が行われ

たと伝えた後、作曲者の佐村河内氏は「35歳の時に聴力を完全に失った」と紹介される。

自宅の暗い部屋で、手話通訳者を介した佐村河内氏のインタビューが始まる。テレビのスピーカーに手を当てて画面の演奏を見つめながら、指に伝わる振動で音を感じる努力を10年続けたという佐村河内氏の体験が語られる。机とふとんしかない暗い「音楽室」の室内や、音符で埋めつくされた「創作ノート」が紹介される。さらに、精神的な病や耳鳴りに悩まされて、10種類の薬が手放せないという。頭に浮かんだメロディを正確に楽譜にできる絶対音感を頼りに、砂嵐のような激しい耳鳴りの中から「かすかに見える音を必死につかみ取る」という作曲のイメージがCGの画像で示される。

続いて、2013年2月の「交響曲第1番HIROSHIMA」のコンサート映像にあわせて、この作品は広島市の被爆2世である佐村河内氏の「鎮魂と希望への祈りを込めたシンフォニー」であり、CDの出荷枚数は17万枚を超え、被災地で特に聴かれていると伝える。

佐村河内氏が、東日本大震災の被災地である宮城県女川町を訪れて、仮設商店街でファンと交流しながら、「人は闇が深ければ深いほど小さな光が輝いて見える」と語る。震災で母親を亡くした石巻市の少女は、佐村河内氏との再会を喜びながらも、今も震災の傷は癒えていないと紹介される。佐村河内氏は、「生者と死者を超越した愛を、美しい思い出のような音楽として表わす」と、被災地のための新曲「ピアノ・ソナタ第2番」への思いを語る。

最後に、発表会前日に来日した韓国のピアニストのテスト演奏を、ピアノに手を当てて確認する佐村河内氏の姿や、演奏会当日のピアノ演奏のハイライトシーンなどが紹介される。スタジオでコメンテーターとキャスターが称賛のメッセージを述べて、特集は終了する。

6月13日～14日、フジテレビ『スーパーニュース』（約3分）、NHK総合『ニュースウオッチ9』（約12分）、フジテレビ『めざましテレビ』（約1分）、テレビ朝日『やじうまテレビ!』（約5分）も、上記新曲発表会をストレートニュースやニュース企画として報道。

○7月、週刊誌が、佐村河内氏の半生を紹介。

8月、全国紙が、佐村河内氏の「交響曲第1番」と「シャコンヌ」のヒットを報道。

8月、全国紙が、佐村河内氏の「レクイエム ヒロシマ」を米国の青少年合唱団が来日公演で合唱すると報道。

○8月、全国紙が、佐村河内氏の「レクイエム ヒロシマ」と「交響曲第1番」が子どもたちとの交流から生まれたことなどを報道。

8月24日、NHKラジオ『関西発ラジオ深夜便』が、佐村河内氏のプロフィールも含めて、「交響曲第1番」の第1楽章を約22分放送。

9月、音楽雑誌が、「ピアノ・ソナタ第2番」を作曲した思いなどについて、佐村河内氏のインタビューとともに掲載。

10月13日、NHK総合『サンデースポーツ』が、フィギュア・スケートのショートプログラムの曲に、男子選手が佐村河内氏の「ヴァイオリンのためのソナチネ」を選んだと紹介。練習の様子、選手のインタビュー、佐村河内氏との対面場面など

を約12分放送。

10月、佐村河内氏の半生、「ピアノのためのレクイエム・イ短調」の作曲過程などを描いた「魂の旋律 - 佐村河内守」がNHK出版から刊行。

11月、「新潮45」が「『全聾の天才作曲家』佐村河内守は本物か」を掲載。

○11月、音楽雑誌が、佐村河内氏が「ピアノ・ソナタ第2番」を作曲した経緯を報道。

○11月、週刊誌が、佐村河内氏の音楽活動を紹介。

○12月、女性誌が、佐村河内氏の半生についてインタビュー記事を掲載。

12月、音楽雑誌が、佐村河内氏の「ピアノ・ソナタ第2番」などについてインタビュー記事を掲載。

12月27日、NHK総合『あさイチ』が、『NHKスペシャル』の一部や「交響曲第1番」などを約15分放送。「ヴァイオリンのためのソナチネ」に合わせて、華道家が生け花を披露。

2014年

1月、経済雑誌が「THE100 2014日本の主役」のひとりとして佐村河内氏を紹介。

○1月、女性誌が、「ピアノ・ソナタ第2番」の作曲経緯と佐村河内氏の半生を紹介。

9 問題の発覚

.....そして、2014年2月、新垣氏の告白で、佐村河内氏を取り上げた番組が虚偽の事実を伝えていたのではないかという疑惑が浮上した。

* * *

人々に闇の中にさす希望の“光”を感じさせる交響曲を、全聾で被爆2世でもある作曲家が、重度の耳鳴りに苦しむ“闇”から紡ぎ出したという「物語」。「交響曲第1番」の異例の大ヒットは、楽曲の素晴らしさに、メディアによるこの「物語」の度重なる強調が加わって生まれたのではないだろうか。

問題発覚後、一転して、佐村河内氏に一齐に強い非難を浴びせたメディアにはとまどいも覚える。佐村河内氏が「物語」を創り出したのだとしても、メディアによって繰り返し伝えられていなければ、それが広く知られることはなかったはずだ。佐村河内氏によれば、自伝はそれほど売れなかったという。「物語」が“全聾の天才作曲家”“現代のベートーベン”として広く流布したのは、メディア、特に視覚と感情に訴えるテレビに負うところが大きかったように思われる。

それでは、この「物語」は、どこまでが事実でどこからが虚偽なのだろうか。

委員会は、審理対象の7番組を制作したディレクターとプロデューサーから聴き取

りを行った。また、佐村河内氏と新垣氏の聴き取りを実施したうえ、作曲や聴覚障害に関する文書等の提供を受けた。さらにレコード会社やゲームソフト会社に照会し、耳鼻科の専門医から聴き取りを実施するなどの調査を行った。その調査の詳細は「別添」を参照されたい。これらの調査によって、委員会が可能なかぎり確認した事実を、佐村河内氏の「作曲」活動（ ）と聴覚障害（ ）に分けて詳論する。